

## The Prodigal's Sister 「放蕩息子の妹」

December 16, 2001

### Part 3

第三章：僕と踊ってくれないか？

四日間、昼の間睡眠をとり、夜歩いた。  
いなご豆の木の下で、厳しい夜のせいで  
疲れきった娘はぐっすり眠っていた。  
彼女の隣では、放蕩息子が辺りを見渡しなが  
横たわっていた。音を出さずに唇は動いている。  
いまだに落ち着かず、眠れない。  
その目は、空と地の間に浮いている木の枝と  
その木の血色に染まった樹皮に釘付けだった。  
国王に対して裏切りを働いたと告発された者や、  
国宝を盗もうとした盗賊達の  
首をつるすために使われた木だった。

ニクヴァの口から声にならない言葉が出てくる。  
「父よ、この裸より惨めな状態の息子を  
ぼろきれで包んでください。  
残飯袋から食べ物を恵んでください。  
奴隷と共に生活させてください。  
あなたを軽蔑して、嘲笑しましたから  
私があなたに与えた侮辱は、  
この屈辱の木を血に染めた罪よりも大きいのです。  
でもこの木ですら、命が宿い葉を広げ  
私をその木陰で包んでくれます。  
王と並んで、とはいいません。  
ただその翼の下に座らせてください。」

そうして、放蕩息子は、父との挨拶を練習し  
妹が起きるのを待った。  
昼過ぎに妹の体がすこし動いた。  
「よかったら水を汲んでこようか？」兄は言った。  
「うれしいわ、ニクヴァ。  
もうパンは全部なくなってしまったのよね。」

「わかってる。なんとか今夜のうちに家にたどり着こう。  
西の空は雲行きがよさそうだ。きっと着けるよ。  
水をもってくる。」  
兄がもどってきたときには、もう荷造りが済まされてあった。  
「マノン兄さんにあなたを連れてくるって言ったわ。」  
「で、兄貴はなんて反応したんだい？」  
ハヤネタは答えず、顔を隠して歩き出した。  
「痛みを口にだすのは時にはいいことなんだよ。」  
「わかってる。『俺には関係ないことだ。勝手に行って  
時間を無駄にするがいい。』って言ったの。」  
妹の頬を涙がつつた。兄が聞いた。  
「どのくらい、マノンはそんな風に思っていたんだろう。」  
「上手に隠してきたのじゃないかぎり、初めからだと思う。」  
「驚きゃしないさ。一度も手紙書いてこなかったし。  
軽蔑されているっていうのは、結構なことさ。  
あいつの哀れみを受ける資格はないし、  
あいつの愛情を俺は要求もしない。  
俺が親父をあんなふう足蹴にしてしまったから  
あいつが俺のことをなんて呼ぼうと、  
昔からなんて思っていようと  
俺はその非難を受けるにふさわしいんだ。  
それほど憎悪と釣り合うくらいの  
大きな愛をあいつは持っているってことか。  
ひよっとしたら、  
もしあいつが俺が親父に会いに来たって知ったら、  
親父の尊い配慮、言葉には出来ないほどの貴重な親父の心、  
高貴な知性を俺が見るために帰って来たって知ったら、  
もしかしたら俺の魂に対しての哀れみか優しさみたいなものを  
マノンも持ってくれるかもしれない。」  
「そんなご褒美が待っていてくれたらって願うわ。でも、  
マノン兄さんの怒りは、あなたが期待しているのとは  
だいぶ違う方向に向かってしまったの。  
彼の怒りはお父様の偉大さを図るための道具なのよ。  
でも、遺恨と苦痛は、哀れみの奴隷としては生れてこないし  
私たちが父の愛と呼ぶ歓喜のあふれる泉を  
宝物にしている状態からも生れては来ない。  
彼のよい行いを苦しみにしているのは

まったく別の川からの水なのよ。」

日が暮れ始め、二人が大高原にむかうでこぼこ道を  
登り始めるころになると、二人の会話は止んでいた。  
二人の眼下には、十年間の空虚が打ち破られ  
金色（こんじき）のゆれる麦の穂が、風に浮かぶ泡が  
それが壊れる瞬間まで偽りの美しさをまとい  
彼を歓迎していた。

西の崖の向こうの海岸に背を向けて  
彼は震えながら道にたたずんでいた。

逆方向に向かっていったのが、

まるで昨日の出来事のように思えた。

どこまでも続く黄金の海原のような草原が  
彼の目の前に続いていた。

ここよりも優れた場所が遠くにあるだなんて、

どんな敵が少年に信じさせたのだろう、と彼は思った。

突然彼は言った。「俺の顔！髪！ハヤ、見てみろよ。俺、汚すぎる！」

妹は微笑み、ゆっくり深呼吸して言った。「行きましょう。」

老人の椅子は、前に後ろにと揺れていた。

その唇はあたかも彼の好きな詩篇を

口ずさんでいるかのように静かに動いていた。

黄金と深紅の日差しが、まるで幸せを作り出す

超宇宙的な薬が発見されたかのように

畑の西のほうを煌々と輝かせていた。

でも揺り椅子から以外には何の音も聞こえなかった。

そのとき、手すりの上のはるか遠くに二つの影が目に入った。

老人の動きは一瞬止まった。

「ハヤが着ている外套に違いない。」

手すりにつかまりながら立ち上がった。

よく見ることができるよう。

そして、娘がいつもするように老人にむかって手を上げた。

それから、もうひとつの影を先に行かせようと促した。

老人の魂がそこにすべて注ぎ込まれていたから

彼にはそれが誰かわかっていた。疑う余地はなかった。

杖を投げ捨て、階段をふみはずす恐れから

それをすべて飛び越えて、そして走った。  
威厳ある人間であることを、膝が悪いことすら忘れて。  
老人は頻繁に思っていた。いつの日か、この膝で  
楽に走れる日が来るのだらうと。  
そのために役に立たなくなっていたのではないのか？

息子の目が見えるまで走り、止まって息を整えた。  
そして息子を抱擁し、昔おやすみのキスをしていたところに、  
今は汚くがさがさになった頬に、自分の頬をつけた。  
彼のべったりと固まった髪の毛の間に自分の指を通した。  
単調で嘔吐のような泣き声とともに  
四千の夜のあいだに蓄積した悲しみと痛みを解き放った。  
それから、息子が泣きながら言った。  
「お父さん、もしよろしければ、  
私をあなたの奴隷にしてくださいませんか？  
あなたに罪をおかした私は、  
もうあなたの息子にはなれませんから。」  
それに対し、この偉大な老人は  
「それとは別の計画がある。」と答えて  
集まってきた召使たちに言った。  
「指輪を持ってきなさい。私の最高の礼服と皮靴も。  
火をつけて、太った子牛をほふりなさい。  
今までにしたこともないような盛大な宴を開くのだ。  
死んでいた息子が無事に生きて帰って来たのだから。  
彼は迷子になっていたが、今見つけ出されたのだ。」  
召使たちはみな通常の仕事をすべてやめ、宴の準備を始めた。  
全ての門柱に旗がひるがえり、祝いが始まった。

いつものように、マノンは遅くまで畑で働いていた。  
夜明けと同時に畑にでて、一日中働くのだった。  
「義務を怠ってはならない」というのが口癖だった。  
長時間労働に誇りを持ち、召使いに飯を毎日食わせてやり  
彼ら全員よりも価値ある人間であるということ知らしめた。  
家から音楽が聞こえ始め、  
召使たちが踊りながら庭に出てくるのを見た。  
煮えたぎる怒り。それが彼の最初の反応だった。  
なんというやりかたで我々の創造主に仕えるのか？

いったい何の祝日だというので、こどものように気違いじみて浮かれ騒ぐのか、叩いて躑せねばならん。そうして彼らがどうやって仕え服従するということを学ぶかどうか見ることにしよう。

「このどんちゃん騒ぎは一体なんだ？」責めるように言った。手をたたきながら召使たちが家から流れ出てきた。

「戻られたのです。あのかたが戻ってきたのです。ニクヴァ様がお戻りになられたのです！」

「さしずめ仲間の泥棒たちと共に牢獄に入ったままでか？」眉をひそめて言い放った。

「とんでもありません、マノン様。ご主人様が、一番肥えた子牛をほふって宴会を催すようにお命じになられたのです。そして『ぶどう酒を持ってきて、息子のために杯を合わせるのだ。みんな、今日はもう仕事をやめ喜びをもって私の指輪と最高の礼服をもって来てくれないか。そして、この生きていた私の息子に与えてくれ。』とおっしゃったのです。」

長男は啞然として、自分が昔立てた塀のそばに立ち、家に入ろうとはしなかった

父親は長男を呼びに塀のところまで来て、言った。

「お前の弟が戻ったのだよ、マノン。中に入って会って来なさい。彼はまるで別人のようだ。お前もきっと驚くぞ。」

「わたしが何に驚いているか申し上げます、父上。父上が汗水たらして稼いだ財産をうばい、ノアシユの下水に捨てたい放題に遊女とみだらな行為をするために父上に金を出させたにもかかわらず、招かれた主賓のように自慢げにかえってくる事ができる、それに驚いているのです。

私がこの土地に収入を入れようと奴隷のごとく労働している間、あなたを扉の影で十年間も泣かせたんですよ。

ご主人様、選んでください。どちらをとるのですか。

あの中にいる、不正の息子か働き者の息子の、この私か。」

「この十数年間、この場所を、ここにいることを  
おまえが楽しんでいたら私は思いたいよ、マノン。  
毎夜毎夜、怒りを抱いたまま眠りにつくことは  
心を無感覚にしてしまうのだよ。  
おまえは自分自身に対しての闘争を遂行してしまったのだ。  
人生における致命的な罠というのは、気をつけてくれ、マノン  
なにも弟が夢中になってしまっていたものだけではないのだ。  
息子よ、盲目にならないでくれ。  
私が所有する全てのものは、  
初めからお前のものだったではないか。  
それもただなのだ。ずっとだよ。だがな  
お前が賃金を払われるのを求めているのだったら  
遺産はお前のものにはならないだろう。  
さあ、おいで、息子よ。一緒に宴会を楽しもう。  
今日の労働は終わったのだ。」

だが、マノンは石のようにそこにとどまり、父親を一人で帰させた。  
扉のところで少女がそれを見ていた。  
父親が通り過ぎるときに  
「ひょっとしたら、もう一度…」彼女の手をとりながら言った。  
「我らが少女は、死人を生き返らせることができるかもしれない」  
彼女は振り返り  
生きる恵みを受けて笑っているニクヴァの輝いている顔を見た。  
そして、マノンが建てた塀のむこうの夕焼けの影の中を歩いた。

彼の顔の絡まったひげの上に  
花粉の埃と流れた汗ですじができていた。  
彼の仕事着は臭いにおいがした。  
両方の手の指間接の真ん中には水ぶくれができていた。  
落胆という言葉が彼の凍りついた顔に書かれていた。  
無駄だった、彼は思った。  
競争も労働も、みんな無駄だったと父上は言ったんだ。  
費やした時間も年月も汗も涙も計画も  
私の権力も  
無価値だったんだ。  
ハヤネタは、灰色とも茶色ともいえぬ彼の頬にキスをした。  
「マニー、疲れているのね。」

何か飲み物でも持ってこようか？」  
 首を振りながら答えた。「いらないよ」  
 「マノン、お父様が言ったことで、  
 息が止まる思いがしたでしょ。  
 その気持ち、わかるような気がする。  
 あなたの今の喪失感も。  
 あなたの汗水たらした労働が無駄だったんだもの。  
 それは本当のことだけど、でもね、  
 遺産がただだと言うこと自体が贈り物ではなくて？  
 地下に隠された、沢山つまった恵の宝箱は、  
 稼いで手に入れるのではなくて、見つけられるものなのよ。  
 踊りだってそうだし、  
 幸せの祝会だってお金を払うものではないのよ。  
 日々の労働は何にも役にはたたない。  
 喜びという贈り物は売り物じゃないのよ。  
 悪を遠ざける為に一生懸命働いてきたのに  
 今はただ喜ぶことが難しくなってしまったのね。

でもね、マニー。見て。父上と召使いたちとあなたの弟が家の中で  
 あなたに入ってきてもらいたいと願っているのよ。  
 子供たちが太鼓をたたいているのを聞いて。」  
 彼の手を取った。「大丈夫だから。来て。」  
 そうして、心の足かせは砕かれ落ちた。  
 長い間こん睡状態にいたものが目を覚ますようだった。  
 そして妹に言った。「僕と一緒に踊ってくれないか？」

<呼びかけ>  
 そして、ああ、キリストよ、光あれ  
 物事が正しくみえるように  
 悲惨な二つの種類の死の間で  
 ああ、その光で息を与えたまえ  
 もう一度生きられるように  
 異国の小屋の快樂からもどれるように  
 父の農地で疲労した  
 高ぶりの腕から開放されるように  
 悪の怠慢と快樂  
 悪の労働と法律の自尊心

どちらの場所からでも戻れる道  
それは恵の言葉で開かれる  
ああ、キリストよ、私たちが  
神からの遺産はただであると  
知ることができるまで  
忍耐を与えてください  
そこに行くための切符は  
そこに行きたいと願う思いだけ

翻訳：愛咲えみ